東海大学資格教育研究
第１号
DOI: 10.18995/24367664.1.71

〈資料〉

松前記念館の博物館実習

── 博物館との連携による博物館実習プログラムの構築 ──

篠原　聰　川﨑　一史　菊地　悠介　佐藤　美子
瀬戸　優香　谷　拓馬　吉井　大門

はじめに

東海大学教職資格センター（湘南キャンパス）では、文学部、文化社会学部、教養学部の芸術学科、人間環境学科自然環境課程、理学部、工学部建築学科の学生を対象とした学芸員課程を開設している。法定科目である「博物館に関する科目（本学では「学芸員に関する必修科目」）」と大学独自の「学芸員に関する学部学科主専攻科目」の二つの科目群を１年次から段階的に修得するというカリキュラムである。法定科目である「博物館実習（3単位）」については、本学では学内実習にあたる「博物館実習 1（2単位）」を３年次に、館園実習にあたる「博物館実習 2（1単位）」を４年次に開講している。「博物館実習 2」については、学外の博物館施設での実習を基本としているが、湘南キャンパス内にある松前記念館（東海大学歴史と未来の博物館）での実習も可能である。

松前記念館は 2004 年に博物館相当施設の指定を受けて以後、教職資格センターと連携し、本学の学生限定で「館園実習」を受け入れ、これまでに 300 名以上の学生の学びの場として機能してきた。近年では「博物館実習 2」の履修生の 1/3 から半数程度が松前記念館で実習を行っている。当該実習に関しては、2021 年度から人文系博物館との連携による実習プログラムを試行している。本稿は、学外の博物館学芸員との協働による実習プログラムの構築とその実践に関する事例報告である[1]。

（篠原聰）

1．なぜ博物館と連携するのか

1-1　正課外の実践プログラムから実習プログラムの構築へ

教職資格センターの学芸員課程では、2013年度から博物館との連携による正課外の実践プログラムを導入している。彫刻の森美術館との連携[2]（2013-15）が最初で、2015 年には川崎市市民ミュージアムで開催された「渡辺豊重」展、神奈川県立歴史博物館で開催された「五姓田義松」展でも関連イベントとして連携プログラムを実施した。いずれもワークショップの企画運営に学生が関与するという内容で、対象は学芸員課程の学生である。その

1　本稿の執筆者は以下の通り。篠原聰（松前記念館マネージャー）、川﨑一史（文化社会学部北欧学科４年）、瀬戸優香（文学研究科史学専攻修士課程１年）、佐藤美子（川崎市市民ミュージアム副館長・学芸部門長）、谷拓馬（川崎市市民ミュージアム学芸員）、菊地悠介（川崎市市民ミュージアム学芸員スタッフ）、吉井大門（横浜市歴史博物館学芸員）。尚、本稿は人文系の博物館との連携に範囲を限定した実習プログラムの実践報告である。

2　篠原聰・小林俊樹「博学連携によるインターンシップの取り組み：東海大学×彫刻の森美術館　キュレーターの“たまご”プロジェクトの実践」（『東海大学課程資格教育センター論集』第 12 号, 2013）参照。

後も川崎市市民ミュージアムとは2016年度、2019年度(台風19号で中止)、神奈川県立歴史博物館とは2018年度に継続して実践プログラムを実施した(前者の事例については3章3-1節参照)。これらの実践プログラムは博物館の「教育普及」に特化した内容であった。当時、いわゆるエデュケーター(学習支援者としての学芸員)に興味関心が高い学生が多かったというニーズによるが、その眼目は、学生が学芸員や館のスタッフとともにワークショップの企画立案から運営、評価までの一連のプロセスを体験的に学ぶことで、学芸員に求められる現場での実践力やマネジメント能力の一端を培うことにもあった。

さて、これまでの正課外の実践プログラムが実際に博物館の現場で行われる「公開普及」を主軸に展開していたとするならば、本稿で紹介する事例は、松前記念館の「館園実習」の一環として試行した、外部の博物館との連携による実習プログラムの実践である。後に述べるように、その内容は博物館の「収集保管」や「調査研究」に特化したプログラムであると言え、このように博物館連携によるプログラム内容の主軸を変更した背景には2つの理由がある。1つ目はコロナ禍で博物館での教育普及イベントの開催が困難になったという消極的な理由である。2つ目の積極的な理由については、本稿各章の事例報告を踏まえた上で言及する(第4章)こととし、以下、本節では博物館との連携による実習プログラムの実施に至る経緯と概要を記す。

1-2　連携の経緯と概要

松前記念館で実施している館園実習は「博物館実習ガイドライン」(文部科学省,2009)の指針も踏まえ、日常業務をはじめとする実務の他、収集保管・調査研究・公開普及活動に関する実習が中心で、実習期間は10日程度である。私立大学の記念館ということもあり、学園史を学ぶ実習プログラムも実施しており、4年間学んだ大学についての理解を深める貴重な機会になると学生からも好評である。他方、「館園実習」の内容をめぐっては、当館が創立者や学園の創設に関する記念館の役割が強い施設でもあることから、収蔵資料にやや偏りがあり、また自治体や地域との交流が少ないなどといった課題もあった[3]。学芸員の資格取得を目指す学生には学内外を問わず、博物館の現状をつぶさに見つめ、現場の実情を肌で感じ取る必要があるとも考えている。また、博物館学芸員と一緒に実習プログラムを構築する作業は、博物館の現場の学芸員の方々に学芸員養成教育の実情に対する理解を深めてもらえる機会になるとも考えた。矢島國雄は、法に照らした学芸員養成を行う大学側の養成観に対して、博物館の現場が望み求める学芸員有資格者の教育訓練レベルはもう少し高いと言え、現状、両者にはかなりの開きが生じていると指摘している[4]。これらが博物館との連携による実習プログラムの構築を導入した動機である。

さて、松前記念館の博物館実習プログラムにおいて2021年度に連携したのは川崎市市民ミュージアムと横浜市歴史博物館の2館である。当該館の学芸員とは研究会などを通して日常的に交流があり、「館園実習」の派遣先としてもお世話になっている。また「館園実習」の課題や大学の学芸員養成教育についても日頃から忌憚なく意見を交わすなどの信頼関係が成り立っていたことが、今回の連携の大前提にある。他方、学芸員との日常的な交流のなかで、例えば、博物館の現場も大学と連携した教育プログラムを実施したいなどを希望していることなども知る機会を得た。川崎市市民ミュージアムとの連携については、神奈川県博物館協会を通して、台風19号により被災した川崎市市民ミュージアムのレスキュー作業に筆者が松前記念館学芸員として参加し、凄惨な被災状況を目の当たりにしたことも連携の強い動機付けとなった。髙橋修は「新しい博物館実習プログラムを構築するにあたっての論点」のなかで「近年は大規模災害が多発したことに伴い、文化財レスキューに係る諸知識・技能習得も学芸員にとって必須となるであろう[5]」と述べているが、実際にレスキュー作業へ参加してみて、学芸員課程

3　過去に松前記念館で博物館実習を受講した学生のアンケート調査による。もちろん、大学博物館の利点もあり、古代エジプトやアンデス文明に関する資料など、大学が教育研究のために収集した大学コレクションの活用や、秦野市や東京都北区など、自治体や財団法人、地域住民と連携した彫刻メンテナンスなどの独自プログラムも工夫して実施している。尚、博物館と大学の連携に関しては、例えば立入正之「博物館と大学の連携について―浜松市博物館と静岡文化芸術大学の共同研究活動の成果報告を中心に―」(『静岡文化芸術大学研究紀要』21巻, 2021)など参照。

4　矢島國雄「博物館専門職員養成の諸問題」(『博物館研究』Vol.52 No.2(No.572)、日本博物館協会、2016)p9.

5　髙橋修「新しい博物館実習プログラムを構築するにあたっての論点」(『博物館研究』Vol.56 No.11(No.642)、日本博物館協会、2021)p22.

の学生には自然災害の脅威についてもその被災現場やレスキュー作業を体験的に学んでもらう必要性があると考えるに至った。

このような経緯を踏まえ、2021年度は試行という形で博物館との連携による実習プログラムの試行に取り組むこととなった。尚、連携事業の協定書等については本学で学芸員課程を開設している教職資格センター（所長：朝倉徹）と博物館長、財団理事長、自治体首長等とで締結した。川崎市市民ミュージアムとの連携は「大学と博物館の協働による文化財レスキュー事業」との事業名で、台風19号により被災した同館所蔵の博物館資料のクリーニングを中心とした実習プログラムを、横浜市歴史博物館との連携は「大学と博物館の協働による文化財資料の保存活用事業」の事業名で、同館の寄託資料のドキュメンテーションなどの資料の取り扱いを中心とした実習プログラムを策定、試行し、松前記念館で「館園実習」を行う学生が同プログラムに参加した[6]。



【図1】事前研修の様子　写真左：川崎市市民ミュージアム（谷拓馬学芸員による被災資料レスキュー見学）
写真下：横浜市歴史博物館（吉井大門学芸員によるバックヤードツアー）

尚、コロナ禍という事情に鑑み、今回の実践実習の実施場所は大学構内の松前記念館を基本とし、教員引率のもと学生が団体で博物館の現地を視察するのは事前研修【図1】の機会のみとした。実習プログラムで使用する資材や博物館所蔵の実物資料は事前に大学に運搬し、実習の当日は学芸員が来校して学生の指導にあたるという体制である。以下の章では、実習プログラムにリーダーとして参加した学生、大学院生の視点（2章）、実習プログラムを担当した学芸員の視点（3章）から、それぞれ当該プログラムに関する事例を報告する。

（篠原聰）

2. 博物館との連携による実習プログラムに参加して（学生・大学院生の視点）

2-1　川崎市市民ミュージアムとの連携による実習プログラム

松前記念館の博物館実習は、近隣の博物館施設や学校との連携を通した実習プログラムが特徴的である。実習生は多様な分野の資料の取り扱いや展示制作、また資料の整理やワークショップの実際などを体験的に学びながら実習する機会に恵まれる。以下では2019年に台風19号により被災[7]した川崎市市民ミュージアムとの連携によ

6　学生関与の文化財レスキューに関しては以下を参照。加藤幸治「小規模地域博物館のこれから―学生と取り組む文化財レスキュー関連活動からの展望」（『全博協　研究紀要』第17号，全国大学博物館学講座協議会，2014）。尚、本年度は本稿で取り上げる内容以外にも、神奈川県（福祉子ども未来局共生推進本部室）と東海大学（教職資格センター）の共同事業「ともいきアートサポート事業」の一環として神奈川県立平塚盲学校・伊勢原養護学校との連携や、秦野市、北区文化振興財団、国立民族学博物館との連携による実習プログラムも実施した。

7　2019年10月12日（土）に上陸した台風19号により川崎市中原区で内水氾濫が発生し、川崎市市民ミュージアムは地下収蔵庫が水没、収蔵品約26万点のうちおよそ23万点が被害に遭った。尚、同ミュージアムの被災及びレス

る実習プログラムの事例について、学生リーダーの立場から報告する。川崎市市民ミュージアムとの連携による実践プログラムは事前研修1回(7/17)を含む計4回(8/27、9/13、10/23)の日程で実施された。

私が参加したのは7月17日(土)の事前研修と8月27日(金)の資料クリーニングの計2回である。事前研修には19名の実習生が参加した。アイソレーションガウン及び不織布マスクを着用した後、浸水した収蔵庫や整理室の当時の被害及び現状に関する解説を受けながら、被災した収蔵資料の古文書に対するレスキュー作業の流れを見学した。また、建築家である菊竹清訓が建築した館内の展示空間に関する解説を受け、博物館施設の空間をどのように有効活用すべきか、また博物館を建築する際に収蔵庫や展示スペースをどのように配置すべきかなど、空間としての博物館施設の活用方法についても考えを深める機会となった。

8月27日は9名の実習生が参加し、松前記念館にて川崎市市民ミュージアムの谷学芸員から改めて紙資料の洗浄作業の説明を受け、実際に被災した紙資料を用いて洗浄及び取り込み作業を行った。厚みのあるハガキから始め、薄い和紙などの紙資料を中心に、比較的破損が少なく、洗浄処理経験のない実習生でも取り扱いやすい状態の資料を用いた。具体的な紙資料の洗浄及び取り込み作業の手順として、まず被災資料と被災古文書救済作業台帳入りのクリアファイルが入ったチャック袋から被災資料と台帳を取り出し、台帳に記された資料点数を確認した。その後に、資料を2枚のネットの間に挟み、水を張ったテンバコに浮かべた発砲スチロールの上にゆっくりと置き、資料全体を水に浸した。刷毛を用いて資料に付着している汚れやカビなどをネット越しに除去した上で、ネットと資料を水から上げ、吸水シートを用いて水気を拭き取った。ネットから資料を取り出した後、不織布と段ボールで資料を挟み、台帳に作業状況を記した。そして、不織布と段ボールで挟んだ資料を積み重ね、横から扇風機で風を送り、資料の乾燥作業に入った。資料の乾燥後、洗浄した資料を新しいクリアファイルに入れ、台帳とひとまとめにし、資料の取り込み作業までを実践した【図2】。



【図2】資料のクリーニング作業(写真左:作業工程を説明する谷拓馬学芸員)

2–2　実習プログラムに取り組んで

被災資料の洗浄に関する実習プログラムを通して、資料を保存及び活用することへの責任を改めて学び得たと考える。実際に台風によって被災した資料を洗浄する際、比較的破損が少ない資料を用いたため、その劣化状況や汚れを見た目のみで判断することが難しかった。しかし、資料の洗浄を重ねるごとにカビの臭いに気づき、水の汚れも視認できるようになり、資料の持つ被災の痕跡や時間の蓄積を確認できた。通常の資料ではなく、被災した資料の洗浄を行うことによって、それらを通し、常に資料の状態を把握し、視認できない劣化に気づくことの重要性や、資料の保存と活用のバランスを均衡に保ち続ける責任の重大さについて改めて考えを深める機会となった。また、洗浄作業や収蔵庫視察などの事前研修を通じて、災害によって被害を受けたミュージアムの一例

キュー状況については以下を参照。『令和元年東日本台風から1年－川崎市市民ミュージアム　被災収蔵品レスキュー活動の記録－』(川崎市, 2021)。

を拝見したことにより、自然災害にまみえた博物館資料及び博物館施設の被害がどれほど甚大であるかを学ぶ貴重な機会ともなった。それにより、資料を適切かつ将来に渡って安全に保存するには、災害時に備え、博物館施設の空間活用についても熟考すべきだということを学んだ。地震や津波、台風や洪水など自然災害の発生頻度が高い日本において、本実習プログラムで得られた博物館の実際的な被害事例、また被災資料のレスキュー事例に対する知見は、日本で学芸員として働く上で必ず活かされるのではないかと考える。また、自然災害が多発している日本において、実習プログラムのなかで被災資料に触れ、また被災した博物館の一例について実体験を持って学ぶことは、学芸員を目指す者として必須条件として良いのではないかと考えられた。総じて、今回の実習プログラムを通し、災害によって博物館施設や資料が受ける甚大な被害状況、及び被災資料の実際的な洗浄作業に取り組んだことにより、資料を扱うことへの責任感や資料に対して愛着を持つことの大切さを改めて学んだ。また、災害による資料及び施設への甚大な被害の実態を理解することによって、学芸員は資料の保存管理を将来に渡って担うために、博物館施設の空間活用に対しても熟考すべきだという点も学ぶ機会になった。

（川﨑一史）

2-3　横浜市歴史博物館との連携による実習プログラム

横浜市歴史博物館との連携による実習プログラムは、バックヤード見学を含む現地での事前研修と、同館の資料を実際に用いて、松前記念館で行われた資料のドキュメンテーション及びコンディションレポートの作成という２つのプログラムで構成されている。事前研修１回(7/10)、実習プログラム３回(8/25、10/12、19)である。以下、サポートリーダーとして関与した大学院生の立場から当該実習について報告する。

事前研修には８名が参加した。吉井学芸員の説明を聞きながら、資料が外部から博物館に保管されるまでの一連の作業の流れに沿ってバックヤード見学を行った。さらに資料の撮影室や同館に併設されている図書館の見学も行われた。バックヤード見学で実習生が見学したのは、燻蒸設備や資料の移動用エレベーター、写場、資料整理室、民俗資料と歴史資料の収蔵庫である。燻蒸設備の見学では、それまでに座学で学習してきた燻蒸作業の仕組みや重要性について改めて確認し、資料を運び入れる際、特に防虫・防菌に注意が必要であることをよく理解することができた。また、資料の移動用エレベーターに実際に乗ることで、その振動の少なさを体感し、資料に加わる衝撃を出来る限りなくすことの重要性についても説明を受けた。収蔵庫の見学では、前室と収蔵庫の関係や構造を理解し、収蔵庫の資料が外気に触れないように保管されていることも確認しる。さらに博物館の抱える慢性的な収蔵庫不足についても、実際に収蔵庫内を見学しながら、共有することができた。

またこれらを見学する過程で、今回の実践実習で調査する資料の保管状況や、それに類似する資料群の特徴なども事前学習として説明を受けている。そのため、実習生は後に実習で調査する資料について、博物館に保管された経緯など理解することとなり、資料への理解がより深まった状態で実習プログラムへと臨むこととなる。

８月25日に松前記念館にて行われた資料のドキュメンテーション及びコンディションレポートの作成に関する実習プログラムには８名の実習生が参加した。プログラム内容は午前と午後に分かれており、午前の部ではレプリカなども活用しながら掛軸の取り扱い方法を学び、午後の部では、博物館から借用した実物資料を使用して、ドキュメンテーション及びコンディションレポートの作成に取り組んだ。

2-4　実習プログラムにおける実習生の様子と成果

参加した学生のほとんどがコロナ禍で学内実習を遠隔で受講していたこともあり、まず掛け軸のそれぞれの部分の名称について学び、さらに掛け軸をかける際に使用する矢筈の説明を受けるなど基礎的な知識に関する学習からスタートした。さらに、掛け軸を壁に掛ける実演を見ながら、手の動きや力のかけ方などの動作のポイントについても吉井学芸員より説明を受け、確認する。これらが一通り完了すると、実習生はレプリカの掛け軸を使用して、壁に掛ける練習をしていく。その際にポイントとなったのが、出来る限りの簡潔な動作で掛け軸に強い力を加えずに扱うということである。実習生もその部分を意識しながら繰り返し練習し、徐々にスムーズに掛け軸を掛けられるようになっていった。また、実習生は２人１組のペアになり練習することで、１人が練習中もう１人が動作を確認し、お互いに問題点を指摘しあいながら動作の確認をすることが可能となり、動作がよりスムー

ズで自然なものへと上達していった。

掛け軸の取り扱い方法について学び、掛け軸の掛け外しの仕方もよく理解した後、借用した掛け軸を調査して、コンディションレポートの作成を行った。また、このひな形は吉井学芸員が調査の際に実際に使用しているものである。そのひな形に沿って作者や作品名、法量、落款などの情報と掛け軸の破損部分(しわやすれなど)を調査した。今回の実習の参加者は歴史学科だけでなく、美術系や理系の実習生もいるため、軸箱や本紙に書かれているくずし字の解読を初めて体験するという実習生も多く、情報の読み取りには少し苦労している一面があったが、指導を受けたり、実習生同士で協力して読み解くことで、情報の調査を行っていた。法量の調査や破損部分の調査では、巻き尺やライト、拡大鏡、カメラなどを使用して実施した【図3】。



【図3】実践実習の様子(写真左:掛け軸の取り扱いを指導する吉井大門学芸員)

この2日間の実習を通し、実習生は資料が博物館に保管される流れと博物館の意義について改めて理解を深め、資料の取り扱い方法について学んだ。事前研修において、今回の実習プログラムで使用する資料のバックグラウンドを知ることにより、資料に愛着をもって実習に取り組むことができていた。また、実物の資料を扱うということで、座学では味わうことのできない緊張感を五感で感じとることができたようである。これらは実習後の実習生らの感想からも見ることができ、資料を丁寧に扱うということや資料を調査することの面白さを得ることができたという意見もあった。また、博物館に保管されている実物の資料を用いて実習が行えたことに、とても良い経験になったと感想を述べている実習生らがほとんどであった。

(瀬戸優香)

3. 大学との連携による実習プログラムを担当して(学芸員の視点)

3-1 川崎市市民ミュージアムと東海大学の連携

(1) 連携の経緯と被災資料のレスキュー事業

東海大学の学芸員をめざす学生との連携事業のはじまりは、2015年に川崎市市民ミュージアムで開催した企画展「画楽60年　渡辺豊重展」での関連事業である。ワークショップ「見て・触って・“かたち”を自由に表現しよう」は、展覧会期間中に6回開催し、135人が参加した。渡辺豊重という作家が、既成概念にとらわれない素材を用いて、多彩な技法で「かたち」を表現していることから、参加者は展示作品を見た後、身近な紙、布、木材、紐、廃材などを使い、好きなかたちをつくるという創作を体現する企画である。立案から、材料の調達、当日の運営に至るまで、学生たちには主体的に取り組んでいただいた。

翌2016年には、当館のアートギャラリーでの収蔵品展「ベスト・セレクション ── 世界旅行に出かけよう」で「ミュージアムで世界旅行」を開催、実施回数は全2回、参加者は合計294人である。学生によるギャラリートークの後に、展示された作品の描かれた場所を旅して、ダンボールの台紙にビズやリボン、シールなどで「トラベ

ラーズノート」を作成するというもので、鑑賞方法や展覧会の内容を一層深めるための補助的な役割を担った。さらに、障害の有無や年齢などにかかわらず誰もが楽しめる『ユニバーサル・ミュージアム』の実践でもあったため、ギャラリートークの内容は、単に描かれたものの歴史や技法ではなく、見て、触って、五感で楽しむことにも着目していた。目隠しをして造形物に触れる「目隠しミュージアムツアー」も実施したこともあって、参加者には非常に好評であった。

そして、2019年の展覧会「犬塚勉－風景が芸術になる」では、「みる・きく・えがく　犬塚勉のまなざしに触れる」という3回目となるワークショップを企画していただいた。残念ながら、当館が被災したため休館となり、ワークショップは中止となってしまったが、ここに内容を記しておきたいと思う。犬塚勉は日常の風景を丁寧に描くことで崇高な景色に変える作家であったが、いわゆる美術大学の出身ではないこともあって、難しい技法を駆使したというよりは、だれもができる方法で描いていたことがその特徴である。今回のワークショップでは、作品をトレースした画用紙に、絵の具を叩いたり、こすったりして描くキットと、紙で小さな窓をつくり、その窓から絵を見るキットの2種類が用意された。この他にパズルもあり、写実的な絵画作品がどうやって描かれるのかを画面の一部を切り取って「よくみる」ことで、作品全体を鑑賞することとは違う視点で作品を「みる」という行為を共有するというものであった。

ところで当館は令和元年東日本台風で被災して現在も休館中である。被災状況と収蔵品レスキューの詳細ついては、ホームページや発行物[8]をご覧いただきたいが、収蔵庫から23万点に及ぶ収蔵品の搬出は2020年6月に完了し、現在は館内でできる範囲内の応急処置を行いながら、会場を借りての展覧会や、学校への出張授業といった博物館美術館事業を再開している。館内での具体的な作業としては、博物館が地下で古文書、美術館がかつてレストランであった場所で紙作品の応急処置、映画フィルム専用のデジタルスキャナーを活用してフィルムの状態確認、外部倉庫に搬出した民具の同定作業である。

今回の実習で使用した古文書などの紙資料[9]は、収蔵庫からの搬出の時に大きなプラスチック袋にいれ、カビの増殖による資料の劣化を遅らせるために冷凍保管した。これらをできる限り元の状態に戻し、安全に保管することができるようにすることが応急処置の目的である。それには燻蒸が有効なのだが、完全に乾燥していないものを燻蒸するのは危険なため、まずは乾燥することが処置の第一歩になる。乾燥方法には、一枚ずつに剥がしてできる限り細分化したものの自然乾燥と、はがすことができないものについては、余分な水分を取った後に再度冷凍し、ドライフルーツやインスタントコーヒーをつくる真空凍結乾燥機にいれて時間をかけて乾燥させるという二通りある。こうして乾燥できたものを燻蒸し、カビが死滅したものを今度は一枚ずつ水で洗浄し、これを丁寧に乾燥させると、紙が元のまっすぐ平な状態にまで戻すことができる。この洗浄、乾燥、さらにそれぞれの資料ごとに袋に納入するところまでが、今回の実習の対象である。

歴史部門で保管していた古文書は30,000件程あり、これらをすべて上記の工程で応急処置を終えるにはおそらく数年はかかるであろう。ご協力に感謝したい。

（佐藤美子）

(2)　実習プログラムに携わって

2019年の台風19号により被災した当館の収蔵品は、現在も多くの支援団体のご支援ご協力を賜りながらレスキュー活動を続けている。今回ご縁があり、東海大学との協働事業として古文書の洗浄作業に取り組むことになった。当館では、すでに古文書の洗浄作業を進めており、方法も固まりつつあるが、まだまだ試行錯誤しながらの日々である。今後も継続的に連携・協力することで、引き続き収蔵品レスキュー活動に尽力していくことは

8　川崎市市民ミュージアムホームページ（https://www.kawasaki-museum.jp/rescue/）及び、「2020年度 川崎市市民ミュージアム 被災収蔵品レスキューの記録集」（前掲註7参照）。
『令和元年東日本台風から1年－川崎市市民ミュージアム　被災収蔵品レスキュー活動の記録－』（前掲註7）

9　古文書については、真空凍結乾燥機を所有している帝京大学文化財研究所、神奈川県立生命の星・地球博物館と連携し、冷凍した古文書の解凍作業についてご協力いただいている。

もちろんのこと、作業を確立していければと考えている。尚、今回の実践実習の作業内容は以下の通りである。

＜洗浄工程＞

①資料内のラベルの順番通りに、水を張ったテンバコに発泡スチロールを入れ、その上に資料と網を重ねたものを浮かせて、筆などで汚れやカビなどを除去する、②網ごとに水から上げて、吸水シートで水気をとる、③作業状況を被災古文書救済作業台帳に記す。

＜乾燥工程＞

④吸水後、ネットを外して不織布で挟む、⑤板ダンボールの上に吸水紙を敷き、不織布ごとに資料を乗せ、吸水紙とダンボールで挟む(※資料の一番上のダンボールにはクリアファイルに入れた台帳もあわせて挟むこと)、⑥板ダンボールと吸水紙に挟んだ資料を重ね、横から扇風機で風を送る。

＜取込工程＞

⑦資料全体を取り込み、順番通りに一つにまとめ、台帳とともにクリアファイルとチャック袋に入れて保管する、⑧作業状況(途中、完了など)を被災古文書救済作業台帳に記す。

前述の台風により、川崎のみならず多くの地域が甚大な被害に遭い、当館以外にも影響を受けた博物館施設は少なくない。自然災害が起きないようにするのは困難であるが、被害を最小限に抑えることや、被災後の迅速な対応は、常日頃の人材育成や訓練等によって、備えを講じることができるのではないだろうか。

今回の連携事業が、当館の状況についてより多くの方に知っていただく、そして全国の文化財レスキューや当館のレスキューの今後に繋がる良い機会となることを願うばかりである。

（谷 拓馬）

(3)　実習プログラムをサポートして

今回の連携事業は博物館部門(歴史分野)が担当し、当館での事前研修1回を除き、全3回行われた(2021年8・9・10月、於東海大学)。筆者は今回が連携事業初参加となる。当館の古文書レスキュー作業の工程は、現行では選別、付箋付与(作業番号付与)、解体、洗浄、目録同定、簡易補修、復元、デジタル化、修復・保存に分かれており、今回の連携事業でおこなう作業は、このうちの洗浄工程にあたる(具体的な作業内容は前項の谷報告を参照のこと)。

古文書レスキュー作業を館外でおこなうことが初めてであったこと、連携事業にあたって事前に必要な資材を準備して東海大学へ発送しておいたことなどの理由から、連携事業初日は、当日の作業準備や実際に作業をしているうちに、ピンセットなどの細かい資材が不足したり、東海大学で準備していたテンバコのサイズが館内のものと違ったため、資材のサイズを変更したりするなど、軽微な問題点がいくつか発生した。また、考えていた作業スペースよりも実際はさらに広い作業スペースが必要であることが分かった【図4】。



【図4】資料クリーニングの会場(作業台のサイズは1200 × 2400mm)

このように、館外での作業は事前の想定通りにいかず、綿密な準備が必要であることを感じた。実際の作業面

では、学生が黙々と、そして、粛々と集中して作業にあたったことで東海大学に発送した242件の資料のうち96件と、多くの資料を洗浄することができた。現状、館内で洗浄作業をおこなう際は、人員数の問題から1～2人が洗浄作業にあたる程度であり、1日多くて約20件しかできないことから考えると、1日でこの量を洗浄できることは当館としてはありがたい限りである。

今回の連携事業は3回で終了となったが、前述の結果に鑑みて、今後もこのような連携事業を継続していきたいと考えている。また、筆者は東海大学の学部・大学院を卒業・修了した身であるため、学部の授業や学芸員課程で学び、その後の博物館施設などで得た経験を後輩である学生達に少しでも還元していきたいという面でも、継続的な実施をと強く思わさせてくれた連携事業であった。

（菊地悠介）

3-2　横浜市歴史博物館と大学との連携

(1)　横浜市歴史博物館の活動と大学連携の経緯

「大学と博物館の協働による博物館資料の保存活用事業」として8月25日(水)、10月12日(火)、19日(火)に横浜市歴史博物館と東海大学による資料整理の実習を実施した(本稿執筆時点では8月分まで実施)。まず、横浜市歴史博物館(以下博物館)のあらましについて簡単にふれておこう。博物館は、(公財)横浜市ふるさと歴史財団が管理運営等業務を行う5施設のうちの一つであり[10]、2006年より指定管理者制度が導入され、同年から5館一括10年、第3期の指定管理を受託し運営を行っている。加えて、横浜市委託事業の受託事業者として、横浜市埋蔵文化財センター、市史資料室等の管理運営等業務や史跡の管理業務、そして、スポット的に各種事業を市から受託をうけ運営をしている[11]。博物館の設立は、1970年、港北ニュータウンの造成工事の本格化に伴い「港北ニュータウン埋蔵文化財調査団」の設立・発掘調査が行われる一方、この地域に残る民俗や古民家についての調査も行われ、調査の進展とともに考古資料館および歴史博物館設立の市民要望が強まり、両者を一体化し1995年1月31日、開館した経緯を持つ。

以来、横浜の歴史・文化や文化財を守り継承していく施設として、現在に至り「市民協働のありかた」「地域との関係」「賑わいの創出」「市民サービス」「外部との連携」を指針に博物館活動を行っている。こうした取り組みのうち外部連携として、近年は財団関連施設である横浜ユーラシア文化館において東海大学と連携し「悠久のナイル」展が開催された。会期中の解説員、ワークショップのボランティアとして多くの学生が本展に携わり資料整理、展示準備、展示運営といったトータルな流れの中で学生が積極的にかかわり実施された事業であった[12]。また、本年度は、民俗分野において横浜市と包括連携協定を締結する神奈川大学の日本常民文化研究所との共同展示を開催した[13]。

今回の連携事業を進めるにあたり、すでに前述のような大学連携の前例があったため、館内では、当該事業を計画・実施するまでのハードルはなくスムーズに進んだが、実践実習を行った後の事業の展望から今後の方針、つまり、ただ実施するだけではなく、実施内容をどういった形で博物館活動にフィードバックさせ、結実できるかといった点が重要視されたかと思われる。

実習では、近年博物館が資料整理を請負うこととなった伊藤宏見旧蔵資料群から掛け軸を整理対象とした[14]。

---

10 博物館以外の施設として横浜開港資料館、横浜都市発展記念館、横浜ユーラシア文化館、横浜市三殿台考古館がある。

11 財団各施設の概要については、(公財)横浜市ふるさと歴史財団ホームページを参照のこと
http://www.yokohama-history.org/

12 会期：2015年1月31日～4月5日

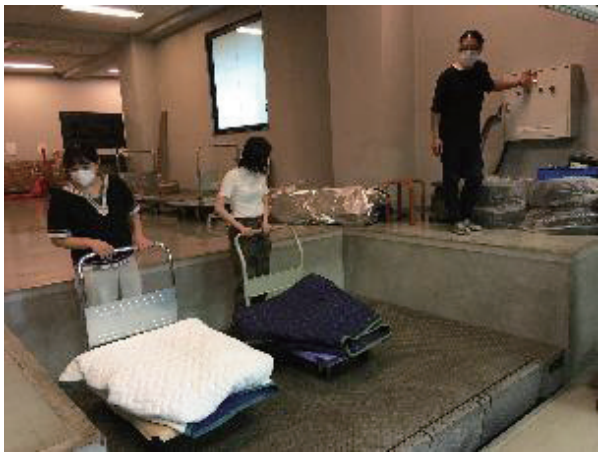
13「布 うつくしき日本の手仕事」会期：2021年7月17日～9月20日

14 本資料群は、横浜市港北区の東洋大学名誉教授・伊藤宏見氏(1936～2019)が生涯にわたり蒐集した資料群の一部である。伊藤氏は英文学、比較文学、仏教学を専攻し、詩人、歌人としても活躍するとともに、多岐にわたる資料の収集家であった。収集資料は古今の書画骨董、古典籍、古文書から仏像彫刻、板碑などの考古資料に及ぶものである。

選定の経緯として、その膨大な量の整理方針を検討していたところ、篠原聰(東海大学教職資格センター・准教授)氏から博物館とも、いずれ連携事業をとの話をいただき、動き出すこととなった。

(2)　連携による実習プログラムの実際

博物館と東海大学との連携事業【図5】は、初の試みとなるため、本事業を進めるにあたり博物館からは「普及事業」として、東海大学からは「実習プログラム」の依頼状を相互にかわす形で実施した。理由としては、掛け軸という特定資料の整理を目的としたテストケース的な共同事業であり、年度内で完結する短期事業であるためであった。そして、本年度の資料整理を実施後、修正・改善点といった軌道修正をして、プログラムをブラッシュアップし次年度以降、本年度の実績をもとに連携事業を継続し、さらに中長期的な連携を視野に入れ、今後、協定書ないしは覚書を交わし、特定の資料整理以外にも多様な内容で連携事業を行えるよう準備段階とするための振り幅を持たせたためであった。

【図5】写真左：事前研修(企画展の準備作業見学)　写真右：事前準備(学生による実習資料の搬出)

事前準備を進めたとはいえ、実際の実習を想定すると、整理対象の掛け軸は江戸時代後期と思われるものであり、かつ日本画の脆弱さを考慮すると、作品・資料の取り扱いに、まだまだ精通していない学生に実作品を扱わせることに対して、加えて事前に掛け軸の取り扱いの授業を受けたとはいえ、コロナ禍における映像による受講学生がほとんどであったため、実習をシミュレーションした際に、作品の破損という最悪の事態を想定せずにはいられなかったことは否めない。

資料整理の効率化を求めるならば、掛け軸の取り扱いをレプリカで指導したのち、資料整理では指導者側が軸の掛け巻を行い、学生に調書を取ってもらうという形式も想定できた。しかし、本年度はいわゆるテストケース的な位置づけでもあり、なにより実物資料に触れてもらうことで緊張感と、モノの持つ存在感を体感してもらいたいという思いもあった。そのため、篠原氏と事前の打ち合わせをし、博物館に資料が搬入され、整理・収蔵・展示・貸出といった流れを想定し当館のバックヤードを含む実地見学を行い、そうした過程のなかに、今回の実践実習の資料整理を位置づけるイメージで、学生たちには挑んでもらえること想定した[15]。結果、程よい緊張感のもと学生諸氏が集中して実習に打ち込む姿がみられ、懸念した事態は起こらず実習を終了することができた。

複数年度同じ学生が継続的に参加できることが望ましいが、単年度という受講授業であるため、毎年度変わる学生に対してどういった形で指導プログラムを作るか、そして調書作成精度をどの程度求め、その内容を均一化するかといった問題点も浮上したが、今後にフィードバックしていきたいと考える。

将来的には、実習の実施回数を増やし資料整理を継続し、博物館と東海大学監修のもと、蓄積した整理資料をもとに作品選定を行い、展示レイアウトそして展覧会の開催といった、「展示を作る」プログラムを学生と進めて

15　実習内容の詳細については本稿第2章の2-3節及び2-4節を参照。

いくことができればと考える。

（吉井大門）

4. 博物館との連携による実習プログラムの構築

4-1　学芸員養成教育とは？　実践的とは？

2章では実践実習に参加した学生と大学院生、3章では連携先の担当者で実技指導者でもある学芸員の立場から今回の実習プログラムの取り組み事例を報告した。これらの報告内容を敷衍しつつ博物館との連携による実習プログラムの実践を通じて見えてきたのは、博物館が所蔵する実物資料を活用することの重要性である[16]。実物資料を学生が実際に手に取り、触りながらじっくりと取り扱う体験的な学びの場が学芸員養成教育のカリキュラムの中で圧倒的に少ないという事実を再確認する機会にもなった。

被災資料レスキューで用いた歴史資料(古文書等)であれ、コンディションレポート作成で用いた美術資料(掛軸等)であれ、資料の分野を問わず、学生は実際に実物資料を手に取って触ることで、その先にリアルな博物館活動や学芸員の倫理観などについての理解を深めることができる。今回の事例でいえば、川崎市市民ミュージアムや横浜市歴史博物館がそれぞれの現場で抱えている課題や問題にもついても当事者として関与する姿勢を育むことができる。自ら体を動かし体験的に学ぶ経験こそが、博物館や学芸員のリアルな実像を映し出すことに繋がると言い換えてもよい。「資料に愛情・愛着を持って接して下さい」と繰り返し学生に語りかけているが、実際に実物資料を手に取りそのことを学生に伝える場面は、本学では学内実習の一コマしかない。他方、連携に携わった学芸員にとっても、大学の学芸員養成教育の実情に対する理解を深める絶好の機会となったことだろう。なによりも重要なのは、参加学生を実習生としてではなく一人の人間として捉える視点である。彼・彼女らの心には、今後のそれぞれのウェイ・オブ・ライフのなかで博物館と長期的な関係を温めてゆく種が、学芸員によって撒かれたのである。学芸員と学生、学芸員と教員の相互交流の重要性を再認識する機会ともなった。

学芸員養成教育のあり方をめぐっては、浜田弘明が「学芸員の高度専門職化とは言うものの、現場では二つの側面があり、資料に関する専門性のみではなく、博物館教育や博物館経営など博物館業務全般に精通した専門性も重要となってきている」と述べている。また、資料を取り扱うためには学問的専門性が必要であることは言うまでもないと断りつつも、浜田は「博物館法の原点(法第3条第4号及び第5号)に立ち戻るのであれば、学芸員は、分野研究の専門家ではなく、資料取り扱いの専門家であることが要求されている」と指摘する[17]。教育普及に特化した本学の過去の実践が、浜田の言う「博物館業務全般に精通した専門性」の育成を志向していたとするなら、今回の実習プログラムはある意味「分野研究の専門家ではなく、資料取り扱いの専門家」の育成を目指した取り組みであったと統括することも可能だろう。もちろん、川崎市市民ミュージアム連携では「修復保存」、横浜市歴史博物館では「収集整理」といった博物館の専門業務の一端を体験的、実践的に学ぶわけだが、ここでいう「実践的」とは、学芸業務の追体験という意味合いよりも、博物館資料を学生が肌で感じ、直に触ることそのものの方に力点が置かれているといったほうが正確である。

4-2　博物館と大学の息の長い関係構築を目指して

これからの博物館やそこで働く学芸員はどのような道を歩み進むべきであろうか。COVID-19パンデミック以降、オンライン展示などの情報発信のあり方に関心が高まってきたが、それだけに熱中するようでは博物館に未来はない。そうではなく、今こそ人々の様々なウェイ・オブ・ライフを下支えする潜在的な力を博物館は発揮す

16 吉田優ほか「博物館実物資料の活用を想定した博物館学芸員養成教育プログラムの開発に関する基礎的考察―近世村方文書を中心として―」(『博物館学雑誌』第40巻第2号, 全日本博物館学会, 2015)ほか参照。

17 浜田弘明「日本の学芸員養成と博物館学」(『博物館学学芸員課程における学びの特徴と現代社会に対応した学芸員養成教育に関する研究』平成27-29年度科学研究費補助金　基盤研究(C) 研究成果報告書 研究代表者江水是仁)pp15-21.

るべきである。館の種類も収蔵品も多種多様な博物館は、多様な民族や文化、自然、時代や地域のあり方を理解し、お互いに認め合う多文化共創社会の実現に寄与する可能性を秘めている[18]。「ミュージアムは長期的に人びとの「生／ライフ」とかかわりうる。そして、そのような営みのなかで人を変え、地域を変えていくことができる」と確信する今村信隆の指摘も重要である[19]。「ひと」に寄り添い「まち」とともに歩むミュージアムは成長し、運営にかかわる者たちも「ひと」も「まち」も変わっていくことができると考える今村は、人々が何度も訪れ直し、息の長い関係を築き得ること自体がミュージアムの強みの一つであると指摘する。人々と博物館との長期的な関係性のあり方を改めて見つめ直す必要がある。

なお、本稿で言及した試みは松前記念館の「実習生」を対象としているが、今後は実習プログラムの内容を精査し、段階的に１年次に開講する「博物館概論」の履修生からでも受講できる実践教育プログラムの仕組みを各館の担当学芸員と検討している。プログラムを通じて学生は、大学４年間の学生生活の中で段階的・継続的に博物館との関係性を築いてゆくという制度設計である[20]。

地域に根ざす博物館のあり方を考察するなかで山本哲也は「博物館が万人に開かれるのであれば、地域住民も観光客もいずれもカスタマーとして認められる。しかし『継続的な活用』というのは、いずれのカスタマーにも共通するのではなく、やはり多くは地域住民にとって可能になる行為であって、それこそがまさに“地域に根ざす”ことが可能となる[21]」と指摘している。卒業後、学生は必ずしも大学が所在する都道府県に定住するわけではないが、学生生活を送る４年間は当該地域の地域住民である。さらに、学生は毎年入れ替わってゆくが教職員の多くは当該地域の地域住民であり続ける。少子高齢化のなか生き残りをかけて本学でも様々な改革を進めているが、地域とともに成長する大学といった未来像を描くならば、地域博物館との連携の可能性は無限大である。大学の教職員はもとより誰もがいつでも自由に学べるような「社会教育機関」としての使命と役割を、博物館はこれからも守り続けなければなるまい。

おわりに

学芸員課程の「学び」に関する調査研究の蓄積がある江水是仁は、館園実習修了者の資格取得動機の分析の中で「学芸員として就職するために資格を取る、というよりも、博物館や博物館学に興味・関心がある割合が大きく、学芸員養成課程としてのみならず、一般教養としての博物館・博物館学の可能性も考えうるものとなった[22]」と指摘している。学芸員課程の学生を「履修生」や「実習生」とカテゴライズして見るのではなく、ひとりの「人間」として捉えたとき、博物館連携による資料の取り扱いを通して実現した生きた経験は、彼、彼女らが大学という教育研究機関に在籍中に試みる様々な学びの網の目の中で、江水の言う「一般教養」としても、人格を陶冶するに足る有用な処方箋となり得るし、卒業後のそれぞれのウェイ・オブ・ライフの中でも博物館と息の長い関係を構築する動機付けになるだろう。

（篠原聰）

---

18 例えば渡辺幸倫(編)『多文化社会の社会教育－公民館・図書館・博物館がつくる「安心の居場所」』(明石書店, 2019)など。

19 今村信隆「生／ライフとミュージアム」(『学芸員がミュージアムを変える！　公共文化施設の地域力』水曜社, 2021)p45.

20 次年度は過去に連携実績のある神奈川県立歴史博物館の角田拓朗主任学芸員とも連携プログラムの計画を進めている。尚、今後の連携プログラム策定においては、以下の事例なども参考になる。緒方泉「博物館実習における『学内実習』と『館務実習』の連動性に向けた一方策」(『博物館学雑誌』第41巻第２号, 全日本博物館学会, 2016)など。

21 山本哲也「“地域に根ざす博物館”とは何か―第三世代の博物館論を軸に考える」(『博物館研究』Vol.54 No.8 (No.614)、日本博物館協会、2019)pp8-9.

22『博物館学学芸員課程における学びの特徴と現代社会に対応した学芸員養成教育に関する研究』(平成27-29年度科学研究費補助金　基盤研究(C)研究成果報告書 研究代表者 江水是仁)p.85.

附記　今回の博物館との連携による実習プログラムの実現にあたっては、連携先の博物館及び学芸員の皆様に多大なるご高配を賜りました。この場を借りて心より感謝申し上げます。（篠原聰）

［Material］

Museum Practice at the Matsumae Commemoration Hall

The Future of Museums Opened up by the Practical Programs in Collaboration between Museums and Universities

SHINOHARA Satoshi
KAWASAKI Hitomi
KIKUCHI Yusuke
SATO Yoshiko
SETO Yuka
TANI Takuma
YOSHII Daimon

Through case studies of the museum practice（practical training）at the Tokai University Matsumae Commemoration Hall, which was realized in the fiscal year 2021 through museum collaboration, we will consider the ideal form of practical education to train students to become curators. We will also consider new missions for museums and the curators who work there in the face of the COVID-19 pandemic.